

**令和7年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業**

中間支援ギャザリング資料（中間支援振り返りシート）

活動テーマ

『山10日海10日里10日

水のめぐりと共に生きる流域文化が息づく島』

活動団体の活動地域：屋久島

活動団体名：合同会社モスガイドクラブ

中間支援主体名：NPO法人HUB&LABO Yakushima

中間支援主体としての獲得目標と達成状況

■ 中間支援主体としての獲得目標 【R7年度当初目標】

活動団体とともにプロジェクトを推進しながら、「人と地域」「人と自然」をつなぐ中間支援機能を強化し、持続可能な未来の創造を目指し、地域ネットワークの強化、次世代育成、資金調達モデルの確立、情報発信力の向上に取り組みます。地域課題に対する実践型プログラムを展開することで、地域の資源や資源を活かした持続可能なビジネスモデルの確立を図ります。屋久島の特性を考慮した取り組みを全国へ展開し、**持続可能な社会の実現に貢献する「つながりを生むエコシステム」**地域として、取り組む中間支援組織としての成長を目指します。

■ 中間支援主体としての獲得目標に対する振り返り（目標達成状況）

本年度は、地域内外のステークホルダー整理や対話の場づくりを通じて、「人と地域」「人と自然」をつなぐ中間支援機能の基盤づくりを進めることができた。特に、流域ビジョンの再整理やゾーニングの実施により、活動団体の立ち位置を地域全体の中で再定義できたことは大きな前進である。

一方で、資金調達モデルの確立や持続可能なビジネスモデルの実装、情報発信力の強化については道半ばであり、今後は連携を具体的な事業創出へと発展させる段階にある。

総じて、構想・整理フェーズから実装準備フェーズへ移行しつつあり、達成度は概ね60~70%程度と自己評価している。今後は、実証的なプロジェクト創出と広域連携の強化を通じて、中間支援組織としての自立性と発信力を高めていく。

中間支援機能ごとの振り返り

チェンジエージェント機能		R7獲得目標（R7年度当初設定） 高めたい機能（◎/○）とその理由		現状の自己評価（R7年度末時点） 自己評価（◎/○/▲）とその理由	
変革促進	物事を整理する	◎	流域ビジョンやステークホルダーを整理し、自分の立ち位置を明確にする力を高める	◎	ゾーニングやビジョン再整理を行い、活動団体の主語を「団体」から「流域」へ転換する支援ができた。
	意味づける	○	個別課題を地域全体の文脈で意味づけ直す力を高める	◎	水循環や水田再生のテーマを、地域との接続点として再定義することができた。
	癒しとなる	○	対話の安心安全な場を設計できるようになる。	○	定期対話を実施し心理的安全性は確保できたが、より深い本音の引き出しは今後の課題。
	見通しをつける	◎	流域ビジョンに基づく中期的道筋を描く。	○	方向性は共有できたが、具体的ロードマップ化はこれから。
プロセス支援	話を聞く	◎	ヒアリングを重ね、関係性を築く	◎	区長や地域事業者への聞き取りを通じ、信頼関係の土台づくりができた。
	場を開く	○	ステークホルダーが集まる場を設計する	○	ワークショップや勉強会は実施できたが、本格的なMTG開催はこれから
	喝を入れる	△	停滞時に介入できる力を高める	△	伴走支援を優先し、強い介入は控えめ
	現在地を確認する	◎	振り返りの習慣化を目標とした	◎	期的なレポート作成と対話を通じて、継続的に現在地を確認できていた
資源連結	新しい人を入れる	○	山・里・海それぞれのキーパーソンとの接続を目標とした	○	候補者の整理は進めたが、具体的な巻き込みは途上
	事例を紹介する	◎	他地域事例を共有する	◎	他地域の取組事例を紹介し、視野を広げる支援ができた。
	引き出す	○	地域住民の本音やニーズを引き出す	○	ヒアリングは実施できたが、構造化と活用は今後の課題
	拡散する	○	情報発信力の強化	○	発信は限定的であり、戦略的な設計が必要
問題解決提示	文字や図に落とす	◎	ビジョンや構造を可視化する	◎	ビジョンマップやゾーニング図を作成し、構造化を進めることができた。
	問いを立てる	◎	主語転換や未来志向の問いを立てることを重視	◎	「誰のビジョンか」という問いを通じて意識変容を促すことができた。
	会議を進行する	○	問いを立てて合意形成をはかる	○	ワークショップの進行はできたが、合意形成型会議の設計は今後の課題
	落としどころを探る	○	合意形成をすすめる	△	実装フェーズに至っておらず、具体的な合意形成はこれから

今後の中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献 【R7年度当初目標】

HUB&LABO Yakushimaは、「青い地球とともに生きる文化」の実現を掲げ、地域循環共生圏の考え方を取り入れながら、屋久島をHUBとして世界とつながる持続可能な地域づくりを推進します。地域住民が主体的に関わり、地域外の資源や知恵を循環させる仕組みを構築することで、持続可能な社会の形成を支えます。

本事業終了後も、環境省や林野庁、屋久島町、地域住民・企業、教育機関など流域を担う多様な主体を結びつける「中間支援組織」としての役割を強化します。共創の場づくりや環境教育、エコツーリズム、持続可能なビジネスモデルの推進を通じて、環境保全と地域経済の両立を目指します。また、観光資源を活かしつつ、環境配慮型の観光モデル確立にも取り組みます。

さらに、屋久島での実践事例を発信し、他地域や政策と連携することで、全国・世界の持続可能な地域づくりに貢献します。企業や教育機関との連携を深め、ESDを推進しながら、地域循環共生圏の発展を目指します。

■ 地域づくりに貢献していくために、今後、どうなりたいか

目指す姿	目標達成に向けた、次年度の行動	チェンジエージェント機能での分類
屋久島において多様な主体をつなぎ、対話と共創を生み出し続ける「中間支援の中核」となる。流域全体（山・里・海）を俯瞰しながら、地域内外の資源と知恵を循環させ、環境保全と地域経済が両立するモデルを実装できる存在を目指す。	<ul style="list-style-type: none">・流域ビジョンを共有するステークホルダーMTGを開催し、具体的な共同プロジェクトを1件立ち上げる。・山・里・海それぞれのキーパーソンとの連携を強化し、役割分担を明確化する。・広域連携（他地域・企業・教育機関）との接続を強化する。	<ul style="list-style-type: none">・変革促進：流域ビジョンの再定義と主語転換の支援・プロセス支援：ステークホルダーMTGの設計・進行

■ 地域づくりに貢献していくために、外部地域や関係者と連携や協力したいこと

ワークを構築したい。また、企業や研究機関と連携し、屋久島における環境再生や持続可能な観光・産業モデルの共同実証を行い、実装可能なモデルとして発展させていきたい。さらに、国や県の政策動向と接続しながら地域実践をモデル化し、広く発信していくことを目指す。あわせて、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進するため、教育機関との連携を強化し、次世代育成につながる学びの機会を創出していきたい。